骨

奥田　かなえ

昨夜から気にかかっていた雨が、やはり夜明け前から降り始めた。寝床の中でうつらうつらと雨音を聞きながら、こんな日に墓掘に行くなんてどうしたものだろうかと案じてはみたけれど、もう甥の省三さんと清隆さんに頼んであるから、今更急に日を替えることもできまい。

手を伸ばして枕元の時計を取り上げ、あおむけに寝たまま、時計を手いっぱい高くに掲げて針を読む。近頃は近視に老眼がでてきたせいか、針が読みにくい。目を細めてみるとまだ五時をほんの少し回ったところだった。雨が段々激しくなってきているのか、屋根や戸袋にあたる雨音がビシビシバリッと高く響く。

もう少し寝ていようか、起きようかと布団の中で右へ向き、左を向きと寝返りを打ってみるが、どうにも体の置きどころがないように思えてきて、のそのそと布団の上へ起き上がって座った。寝床の上に座って見ても、この広い家に、今はわたし一人。一人になってから今日で何日たったろうか。

二人でいる時にはそれほどにも感じなかった空間が、近頃は夜も昼も、私をギュウッと押し畳み、潰しにかかってくるように感じる時がある。

鈍い痛みを感じて、腰の後ろをさすりながら、今から起きてもこれと言ってすることもないがと思いつつ、茶羽織をひっかけてひとまずご不浄へ行く。出てきたところで新聞配達のバイクの音が聞こえて、玄関口からばさりと新聞の落ちる音がした。

新聞を取ってきて食卓に座り、一通り題字に眼を通してみるが、細かい字を読むのは辛い。近眼鏡とは別に老眼鏡もいる自分が情ないと思いつつも、老眼鏡はどこに置いたのだったかしらとくるくるあたりを見回しても見つからない。眼鏡ケースに収めたかしらと開けてみるが、見当たらない。食卓椅子に正座をして心を落ち着けてみる。相変わらず雨音が聞こえるだけだ。

そうだ、昨夜は寝付けなくてお経の本を読みながら寝てしまったんだと思いだし、「あったあった」と呟いて、眼鏡と新聞を持って、再び寝床へ行って座る。新聞を大きく布団の上に広げて改めて眼鏡を通して読み直しである。

夫のいた頃には、こんなことなどしたこともなかったのにと思うと、ひとりでにおかしみが湧いてくる。それに、いつも先に読む夫がおおまかな記事や政治関係は注釈つきの解説をしてくれたので、あとで題字を眺めていれば済んでいた。

しかし、今はそうもいかない。これが一人になった自由さと不自由さ、プラスマイナスゼロなのかと得心して、そのさびしい自由さに静かに身を浸していく。

夫は八月の末に逝ってしまった。たった三か月の入院だった。その三か月を思い返すといまでも涙が自然に流れ落ちてくる。

それは死者に対する弔いの意味もある。しかし大部分の涙の割合は、夫への愛情を振り返るためのものではなく、人生を終わろうとする時期の来た人に対して、思いやりを持てなかった私自身への詫び状としての涙であったろうか。あの日以来、いつもうつむき加減にしか暮らしていけない私自身への負い目に対する慰めかもしれない。

子供たちが大きくなって、最後に残った末の子が一年前にこの家から嫁に出て行ってしまい夫婦二人きりになった時、これからこの人といつまで、どうやって暮らしていけばいいのだろうかと不安な気持ちを持ったのも事実である。

私は女でも口数の多い方ではなかった。若い頃はそれでも結構お喋りが楽しい時もあったのだけれど、歳を経るに従い、何をしゃべっても自分の思いや言葉ではないような気がしてきた。

喋りながら、これは私が言いたいことではない。ああ、また同じことを繰り返していると分かりながら喋ってしまう屈辱感。

それと同時に、体を動かすことにも、段々億劫さが先立つようになり始めた頃からかもしれない。とにかく、なにかにつけて、老いを自覚するようになった頃からなのは確かだ。

夫とも「あれ」、「これ」だけで通じるようになると、余計にしゃべることに大儀さが生じるようになった。

夫は役所と家だけの往復を繰り返す真面目な公務員だった。夫も喋るのは若いころから苦手な人だった。いつも物静かに本を読んでいるか、鋏を鳴らして黙々と生垣のサツキを剪定しているか、盆栽をじっと眺めている姿が似合っている人だった。役所で何か会議でもあって、どうしてもしゃべらなくてはならない時なぞ、前々日くらいから原稿を下書きして部屋の隅でぶつぶつと口の中で復唱しながら練習しているような人だった。

それでも末の子がいる間は良かった。子供が話を皿にもってくれ調理して、夫にも私にも気を遣い、笑いを届けてくれたからである。「ふーん」とか「そうか」とかの相槌だけでも、話の味を十分に堪能していたように思えた。母と娘の関係で、夫よりは余計によく娘とはお喋りをしたかもしれない。

結婚して四〇年以上もたつと、何も言わなくても相手の考えていることや、欲していることが糸電話を通した時に耳元にビンビンと響くのに似ていて、私の心や体には、夫の考えや思いは直ぐに伝わってきていた。

けれどもあの日から、つまり医師からすい臓癌の宣告をされ、余命三か月と告げられた時から、何故かこの糸電話の響きが伝わらなくなってしまった。

それは夫であると思い、また、私の口を養ってくれる人と思って、長い間仕えてきた相手との力関係が真逆になったと気付いたからだろうか。それとも私の本来の冷たさが顔をのぞかせたのだろうか。それは雪が解けて地表が表れてくると、地面の汚さが一層目につくように、一気に私に現れた。私の心は自分でも不思議なほど、愛情の前に打算という生き方が先行し始めたのだ。

自覚するほどでもなかった打算という小さな塊は、日を追うにつれ、夫の病状が進行するにつれ芽吹いてきた。今までいつでも夫第一に考えて暮らしてきた私

の生活からは考えられない事だった。それでも私は夫の命がある間は、そのことに気づかない振りをして、周囲の目を気にしながら、良妻の演技をし続けた。その行為は夫が入院したその日から余計に強く始まったように思える。

寝床の上に座りなおして、もう一度心の中でそこに至るまでの映像を反復してみる。夫の死後これで何回目の反復であろうかと思いながら……。

「奥さん、どうぞお入りください」

看護婦に呼ばれて医師の部屋へ通された。カーテンをくぐると目の前にレントゲン写真がずらりと蛍光灯の灯りに照らされて並べられていた。明るく柔らかな蛍光灯の光は白黒の濃淡で写真を形作り、前衛芸術の作品を見ているような感覚だった。

医師はその写真と私の顔を交互に見比べながら言った。

「残念ですが、がん細胞は肺にまで転移していました。レントゲンを見てください。点々と白く小さいのが散らばっているでしょう?これが全て癌細胞なのです。よくて半年。でもまあ三か月くらいが限度かもしれません」

医師は淡々とした口調で語った。

私はただ「えッ」と言葉を発するしかなかった。涙が一気に溢れ出し、頬を伝わる感触を小気味よく感じていた。しかしその小気味よく思う意志に反するように、涙は後からあとから流れだし、目の前がかすみはじめ、医師の顔がゆがんでみえてきた。

「どうしてこうなるまで放っておいたのですか。もっと早く気が付けば処置の方法もあったのに……」

医師は私の失態をなじるような口ぶりだった。

何故と言われても……私には答えるすべがなかった。

「すみません」

小さくつぶやいて頭を下げて黙って立ち上がり医師の前を辞した。そして、この病院へたどり着くまでの長い道のりを思い出していた。

長年勤めあげた職場を定年後、これからは毎日好きなことをして暮らせると喜んだ。

しかし、ある日、くちなしの花が雨に打たれてくたりとなっているのを手で摘んでとりながら、側にいる私にでもなく自分に言うでもなく、近頃、時々腹の調子が悪い時があると、ボソッと言ったのが始まりだった。

「くちなしは果実が熟しても開かないから、この名前がついているのだそうだ」

そのあとで夫が付け加えた言葉に、ゾクッとしたのを覚えている。夫は自分の身の難儀さを予感していたのだろうか。

しかし、それ以後、何事もなく、夏の百日紅の赤い花の終わりを待って枝を切り、さわやかな秋風にコスモスの花が揺れ始めた頃にまた、一言

「どうも、調子がおかしいような気がする」

と言った。

一度医者へ行ってみればと気軽に答えたものの、私は夫の体の調子を知ろうともしなかったし、積極的に病院へ行こうと促しもしなかった。

そんな時、嫁に行った娘夫婦が一緒に旅行に行こうと誘ってくれた。夫はどうも気がのらないと言いながらも、娘の

「こんなことができるのも、初めて最後かも分からないから」
との強い言葉に、なんとなく二人とも気圧され、コクンと頷いて一緒に沖縄まで出かけた。
しかし、旅行から帰ってから疲れが出たのだろうかと言いながら、目に見えて痩せてくるのに、さすがの私も少し不安になり近所の医院へ一緒に行った。
その時には、どこも異常はみつからないとの結果に胸をなでおろした。しかし痩せていくのは止まらなかった。師走を迎え、正月を越しても、何故か一向に痩せる気配は止まらなかった。さして良くもならないし悪くもならなかった。
たまに訪ねてた娘が父親の余りの痩せように
「ちょっとおかしいから、他の医者にもいってみれば」
夫に強く勧めて、ようやく少し大きい病院へ行ってみることにした。
その日から検査漬けの日々が始まった。胃の透視から始まり、胃カメラ、血液検査など、原因が突き止められないとの一言で検査が繰り返された。検査がたび重なってくると、次第に夫は露骨に嫌がり始めた。それでも、その都度、原因が分からず、もう少し様子を見ましょうとの返事であった。
再度、大きい病院へと娘が気遣ったが、これ以上の検査は嫌だと夫が言い張り医者にかかることを拒否した。私も、夫を説き伏せるだけの気力もなく、ただ、じっと見守るだけであった。
冬がいよいよ厳しくなり、雪が降り始めると夜中に腹が痛むと言ってはご不浄へ駆け込む日が続き始めた。
「どんな調子?」
私は眠い所を起こされたことに少し不機嫌になりながらも寝床の中から声をかけていた。
「うーん、どうもなあ」
「痛むのお?」
私は寒い中、布団から出るのが嫌で大声を張り上げて聞く。今度は返事がないので不審に思うが、あまり長い時間が経過したような気がして、ガウンをひっかけてご不浄へと立って見に行く。
こういう日が次第に頻繁になってきた。食欲はあるのに、食べれば腹が痛むという。痛むから食べるのは止すという。それではだめだから食べてと懇願する。医者に行ってみようと説き伏せる。二人の夫婦の会話はそれだけで一日が終わるようになった。夫は日に日に肉が剥がれ落ち、更に痩せていった。目の下は落ち窪み、黒ずんだ眼の縁は、はっきりと隈取りを見せてきた。
年寄り二人が静かに庭いじりなどしながら肩寄せあって生きている時には、世間の人々は口をそろえて
「羨ましいですこと。結構なご身分ですね」
とか、
「人生の日が暮れていく前のひと時、穏やかに二人で仲良く温めあって生きていけるなんて最高ですね」
などと言ってにこやかに通り過ぎていく。
しかし、少し具合が悪い日が続き、誰かに助けてほしい時には、世間の人々はかかわりを避けるかのごとくに、声もかけず、見てみないふりで通り過ぎていかれることを、この時思い知らされたのも事実だ。

夫が夜中に「痛む、痛む」とうめき始め、夜もろくに寝させてくれない日が続き、なんとか食べてもらおうと心をこめて作った食事も手を付けない日が多くなり始めた時、老人二人だけの生活の寂しさとみじめさ、心細さはいかんともしがたく、私の背後から目に見えぬ何かが、じわじわと私に忍び寄り、私の頭を押さえつけにかかっているように感じられた。ここから逃げ出したいとの思いが募るようになった。

夫の

「大丈夫だから、行っておいで」

という言葉に甘えて、少し夫の痛みが和らぎ、よくなりかけたように思えた時に、娘や息子の家へ逃げ出してみた。しかし逃げてはみたけれど、そこは確かに花咲き匂う心地のよい楽園ではあったけれど、私がじっと座り続けて私の座を温められる場所ではなかった。そこに年老いてきた私の居場所はなく、勇んでいった往きとは裏腹に、すごすごとうなだれて帰らざるを得なかった。やはり私には、寂しくてもみじめでも心細くても、夫と二人で築き上げたこの家にしか、居るべきところはないのだと悟った。

入院をしてからも痛みはどんどんひどくなる一方だった。一か月もたたないうちに立って歩くことを夫は拒否した。そうして下の世話をしなくてはならなくなったとき、私はもう完全に家政婦としての地位に立っていた。

「ああッ、うんこがまた出てしもたあ」

夫が小さな声で言う。

私は黙って布団をめくり、寝巻の前をはだける。

「あああ、もう、なんでもうちょっと早く言わないのよ。尿瓶も便器も傍に置いてあるのに……。パンツを汚さないですむのに……」

私は夫がどう感じているかなど想像もせず、容赦のない言葉を連ねていった。それが私にとっての唯一の気を抜けることだった。

「どうしてか分からんが、いつのまにやら出てしまう。すまんなあ」

「ああ、もう臭いくさい。大人のうんこは臭いなあ」

そういって、夫のパンツをはずして、紙おむつを当てがった。

「それにしても、いつもパンツからはみ出て、寝間着まで汚して。まあ、今回はシーツまで汚れなかったのでよかったわ」

私は顔一面に不服をあらわにしていた。

「すまんくらい言ってもええのに」

私は更に追い打ちをかけるがごとくに夫に迫って言った。

「すまんなあ」

夫は再度、詫びを私に入れた。オムツをしやすいように、右へ向け、左へ向けと命令を出してみる。夫はうめきながらも言われるままに体位変換を試みている。が、もう自分の力で体を動かすことも大儀なのか、思うようにいかない。私は、怒るだけの気力も萎えてくるが、心の底で苛立ってくる波をどうしようもなかった。痛み止めの注射が切れてくるのか、夫は顔をしかめ始めた。

バケツに入れた汚物を片付けながら、私は背後から喉元をギュッと締め付けられて、意識が遠のくように感じた。寝間着についた大便を洗い落しながら、流す水の音にまぎれてしゃくりあげて泣くの

だった。それでも一通り涙を流すと、フンと鼻で一息つけて流れる涙を止めるのだった。

健康な時には当然と考えていた夫の世話が、どうして今、夫が身動きできなくなったこの時に、喜びを持ってすることができないのか私にも分からなかった。ただ、私はやりきれなさと、どうしてよいか分からない不安感にさいなまれるだけだった。

医師からは、あまりにも痛みがひどいようならと、個室へ移ることを勧められた。しかし私は夫を個室に入れるのを断った。もちろん夫も入りたくないと言ったからなのだが、それはむしろ夫の意志ではなく、私の顔色に対する夫の遠慮からであったのだろうと、今にして思えば思い当るのである。

第一の理由は経済的なことだった。あと三か月の命と医師は告げたが、本当に三か月ぴったしで逝ってくれればよいが、もし長引けば私の老後の資金が底をつくかもしれないではないか。そう考えると自分優先の私自身が許せなかったが、それは周囲の前例を見聞きしているせいだった。

夫の長患いのために蓄財を使い果たし、夫の死後は、あてにしていた子供たちからは振り向かれもせず、みじめな生活を送らざるを得なくなっている知人を何人か知っていたからである。私はそうなるのが怖かった。

そして第二の理由が、夫と二人だけの生活を逃れて、やっと病院に来て他人との交わりができたのに、また個室に入って夫と二人だけで病に向きあうだけの気力が残っていなかったからだ。

私は自分が老齢期の半ばにいることは承知していた。そして、入院中の暇を持て余している若い男たちがそこにいた。彼らを相手に冗談を言ったり聞いたりして笑うだけで心が持ち直すこともあった。

「あらあ！今朝も朝から朝焼けさんね」

私が先に声をかけると

「へへへ。夕べのがちょっと残って取れないんだよ。おばちゃん」

若者は嬉しそうに甘えたように答える。

「嘘おっしゃい。臭うわよ。もう食後にひっかけたんでしょ。入院してて飲むなんて頼もしいわね」

「生命保険をかけた分、しっかり取り戻してから出ようと思ってね」

「そんな料簡だから入院なんかをする羽目になるのよ」

などと少し説教も言ってみる。

「まあ、取り戻す前に追い出されるかも……なんてね」

若者は半分真面目、半分ふざけた口調で答えてくる。

廊下でこんなやり取りをしているのを、夫は聞えているはずなのに、何も言わなかった。

昔の夫なら、すぐに

「何を馬鹿なことをしとるか」

と、たしなめの言葉をかけただろうと思うと、余計に言いたくなってくるのだった。

今、夫はその言葉さえ言えない弱い立場になっている。その弱い立場を私は逆手に利用しているのだ。自分でもこんなことをしてはいけないと思いつつも、何故かこの若い男たちと話すという行為に、なんとはなしに心が浮き浮きしてし

まうのだった。
　私は夫が人生の最期を迎えているのだから命の終わりにふさわしく、長年連れ添った者として、夫への愛情をここぞとばかりに飾り立てて夫を喜ばせてあげよう、静かに安らかに見送ってあげようなどとは考えられなかった。ただもう、この苦しい現実からいかに逃げ出すかしか考えていなかった。
「人間はね、生まれてくる時と死に行く時が一番苦しいものなんだよ」
　まだ私が幼かった頃、祖母の膝で聞いた言葉を思い出していた。だからこの人が苦しむのももっともなことなのだと、変に割り切っているのかもしれないと思ったりもした。
　それだけ苦しんでいても、医師の言うように本当にきっぱりと、命の終わりが三か月後にやってくるなぞとは想像もしなかった。だからこそ、たかをくくっていたような気もする。
　私はそんな心の内を覗かれない様に、見舞い客が来ると、しおらしく涙目になり黙り込んで訴えるのだった。見舞い客は私への労いの言葉を一層上積みして帰って行ったものだった。
　朝八時の列車に乗って行くからと約束してあったのを思い出して、私は急いでパンとコーヒーだけの簡単な食事を済ませた。
　仏壇に向かい
「行ってきますから」
　と声をかけて家を出た。
　朝起きてからこれが二度目の音として発したものだった。いくらお喋りがあまり好きではないとは言え、やはり、言葉の余韻音の寒々しさには、いつまでたっても馴れなかった。
　まだ、雨はやみそうもなかった。天気予報では今日一日中降り続くと言っていた。雨が降れば十月の終わりは一層冷たく淋しい。
　私はモンペをはき、昨日から用意しておいた墓に備える花束をビニールの風呂敷に包み、墓掘のための小さなスコップの先を新聞紙に包んだ。花束を胸に抱き、スコップを手提げに入れて傘をさした。雨の日に墓参りなど、人が見たらどんなにかおかしかろうと思いながらも、この雨では駅までいつもより倍の時間がかかる気がして、雨の中へ勇気を出して出て行った。
　約束通り多奈川駅には甥の省三さんがトラックに乗って待っていてくれた。
　清隆さんも
「同じ列車に乗り合わせていたのに会わなかったねえ」
　と言いながら、後から追いかけてきた。
　省三さんの運転で三人はすぐに墓所へ向かった。この二人は夫の兄の子ながら、二人とも大変親戚思いで、夫の入院中から葬儀の後までも、何くれとなく面倒をみてくれていた。
　今日は私の早世した長男の骨壺を掘り出すために手伝いを頼んだら、快く引き受けてやってきてくれたのだった。十一月初めに建立予定の夫の墓へ一緒に入れてやるためだった。
　長男は戦争中に死んだ。わずか五歳の命だった。私たち夫婦にとっては初めての子供で随分大事にだいじにと育てていたのに、空襲警報の合間に、友達と遊びながら相撲を取っていて投げ飛ばされた。その拍子に頭を打ってあっけなく死

んでしまったのだった。まことにそっけない死に方に、私たち夫婦は泣き明かすだけでどうしていいか分からず、本家から言われるままに、ささやかな葬式をだし、本家の墓所の隅っこに小さな穴を掘って盛り土をして長男の骨壺を埋めた。形のよい石を上におき、墓石としておいたのだ。

その後、戦争も終り、早くきちんとした墓を建ててやりたいと思いながらも、その日その日の生活に追われ、とうとう今まで放っておくことになってしまったのだった。

本家の墓所は持ち山の裾野をぐるっと一回りして、小道を少し踏み込んだ中にひっそりと樹木に囲まれてあった。トラックを道端に止めて、私たち三人は小道を通って墓所へ入って行った。

小道の草は綺麗に払われていて、墓所の部分だけがホッと一息ついたように広く開けていた。省三さんの手回しの良い思いやりに気づいたが、何も言わなかった。周囲には樹々が丈高くそびえたっていた。今日の強い雨に打たれて残り少なくなった木の葉が久しぶりの墓参を出迎えてくれたようだった。

雨に濡れた本家の立派な墓石は、相変わらず凛として建っていた。まさしく古い歴史の上に成り立つ本家の威厳を示していた。その横の空き地に、ひっそりと形の良いまま、変わらずに小さな石が座っていた。石は苔が生えて、小さいながらも歳月の重みを漂わせて濡れていた。

まずは持ってきた花束を本家の墓に飾って合掌した。雨は容赦なく降り続き、私は傘を肩にかけていても、手を変える度に肩から濡れていた。

省三さんと清隆さんが私のお参りをじっと待ったのち、しばらく墓を眺めていたが

「おばさん、雨は小降りにもなりそうにないからやってしまおうか」

二人はそういうと、墓石をのけて掘り始めた。石の置いてあった周りを二十センチくらい開けてから、省三さんの持ってきた大きめのスコップを土に差し込んだ。雨を吸った土は歯切れの悪い音がした。あらかた周りを掘ってくれた後、私は持ってきた小さなスコップで土を少しずつ丁寧に除けていった。

「省三さん、割らんように気を付けて……」

清隆さんが傘をさしかけて言ったのと同時に、赤茶の土に染められた白磁の骨壺が見えてきた。

「おばさん、どいて」

省三さんが雨に濡れるのもいとわず、手に持ったスコップを傍らに置いて、そっと手でツボの周りの土を拭いながら、完全な形で骨壺を取り出してくれた。永年たっているので、ひょっとして割れているかと思っていたが、完全な形であったことに何かしらホッとした。

私は持ってきたビニールの風呂敷をそこに広げて骨壺を受けた。肩にかけていた傘が思わず落ちて、あわてて傘を拾い上げたが、すでに服のなかへ雨がしみ込んでいた。

清隆さんの差し出した手と省三さんの手に支えられて、なんとか骨壺を抱え込んだ。骨壺は冷たく私の胸を冷やし、心臓がドクッと一押しされたのを感じた。

持ってきて飾った花々は、雨に叩かれて、いつの間にか、みな頭を垂れてしまっ

ていた。清隆さんが掘った後の穴に土を戻して、元通りにしていた。私は片方で骨壺を抱き、片手で傘を差しかけていたが、省三さんも清隆さんも傘がなかった人のように、びしょ濡れになっていた。

省三さんに促されて三人はトラックに戻った。髪の毛からも顔からもしずくがポタリぽたり落ちて、座席がすぐにもじっとりと湿ってくるのが分かった。

清隆さんは少し省三さんの家に寄ってゆっくりしていくというので、私は駅まで送ってもらうことにした。二人とも黙って、雨に濡れたシャツを拭いていた。

この甥たちは、甥といっても年齢はさほど私と変わりがなかった。夫は末子だったため長男長姉の子供である二人とは、年齢にあまり差がなく、夫は兄弟のようにして育っていた。

省三さんはすでに頭がつるりと禿げて、いつもその頂点は丸く光っていて、本家の跡取りらしい貫禄があった。清隆さんはサラリーマンで、定年にはまだ少し間があるというのに、腹が出て白髪も目立つようになっていた。二人は私たち夫婦を「おじさんおばさん」と呼ぶものの、他の親戚とは一味違う、馴れた親しさがあった。

夫の死後、一人になってから、私は人のありがたさや親切がやっとわかるようになったと言ってもよかった。人という字の本当の意味を理解した気がした。

「おばさん、一人になってどんなもんかな。寂しかろうのう。わしゃ、まだ分からんが」

と省三さんが言えば

「おばさんいうても、わしらと歳がそう変わらんから、まだこれからぞな。寂しい時にはいつでも話に来てくれんか。ばあちゃんも喜ぶから」

と清隆さんが言った。

「ありがとう」

私は本当に素直な気持ちで答えた。トラックのフロントガラスに雨がバシっとあたってはねて散っていた。私は寂しさや悲しさをこの二人に説明する気はなかった。二人に対して、再びありがとうを言って、ただ黙って頷いていた。

抱えた骨壺を見ながら私は考えた。辛いこと、苦しいこと、寂しいことは人と分かち合えないものだということを、私は良く知っている。

この子が死んだ時もそうだった。私は半狂乱のようになって毎日、毎日ただ泣き続けた。人の死に目に出会ったのが初めての経験ということもあった。その死が我が子だという理由もあった。そして私は自分の子供の死という辛さを、夫だけは分かってくれていると思っていた。子供の親だから当然の事だろうと……。

しかし夫は意外に平静だった。死は仕方のないものとして夫は受け止めた。戦争中というとんでもない世相ではあったけれども、夫は共に泣き明かしてくれる相手だと思っていたのに、ただ、淡々とした口調で私を慰めるだけだった。私はとてもそのことが腹立たしく、いっときの間は食事を向き合って取ることさえ拒んだほどだった。今思えば、この時から夫との距離が開き始めていたのかもしれない。

それにしても夫の死を見送った後、こうまで平静にしていられるのが何故か不思議だった。齢を取ったせいなのか。それとも長男の死に始まって、両親の死、兄弟の死、夫の同僚の死、ご近所の方の

死等々、身近に寿命をまっとうして死に逝く人々を多く見てきた経験のせいだろうか。私の心は癌宣告を受けた時ほどに、波風が立たないのが不思議だった。

今はただ一人で、死んだ人の世俗の後始末の処理を、順々にこなしてゆくのが精いっぱいの毎日なのだ。

私は省三さんと清隆さんにこの強い雨の中での墓の掘り起こし作業について、何度も何度もくどくどと同じ言葉で礼を述べて、帰りの列車に一人、骨壺を胸に抱いて乗った。

省三さんがしきりに寄ってお茶でも飲んでいくようにと誘ってくれたが、断った。清隆さんは久しぶりだから伯母さんの顔でも見ていこうかと言いながら、省三さんに誘われるままにトラックに乗って行ってしまった。

帰りの列車はがらんとすいていた。窓際の席にぽつんとひとり腰かけた。胸に抱いた骨壺からは四十年にわたる雨と土と風と少しの光の匂いがまじりあって立ち上ってきた。汽車の窓から見る紅葉は未だ青いのもあったが、この雨でおおかた路上に振り落とされていた。

小降りになった雨の中で、少しついた赤さが逆に吸い取られているようにも見えた。

家に着いて

「ただいま」

と声をかけてみるが誰もいるはずはない。しーんと静まり返ったままだ。空気のひんやりした冷たさが、顔の皺の一つひとつに入り込んでくるように思える。濡れたモンペを脱ぎ、体を拭きなおして、スカートに履き替えると、手と顔を洗った。頭の水けを、タオルで丁寧にふき取ったが、いつまでも水けはタオルに残った。

持って帰った骨壺を泥のついたままでは仏壇に置くこともできないので、とりあえず新聞紙を広げて、ひとまず縁側に置いた。

ふと見上げた時計の針で、夕食の用意をする時刻になっていると気付いたけれど、なんだか食べる気も起らず、畳に座り込んだまま、壁にもたれてしばらくぼんやりしていた。

こんな時、お茶を一杯入れてくれる人でもあればと思ってしまう。けれど誰もいない。静けさだけが今の私には安らぎかもしれないと思い直した。仕方なしにテーブルまで四つん這いで這ってゆき、ポットから急須にお湯を注いで湯飲みに注いだ。朝の出がらし茶だったが、それでも喉を通る時には美味しさ感じてホッとした。そうしてまた元の所へ這って帰って、そのままぼんやりと壁にもたれて座っていた。

何時の間にかうとうととしていたらしい。何時間過ぎたのか分からなかったが、目を開けると、部屋の中はすでに真っ暗闇になっていた。

仏壇の前に座りなおして蝋燭と線香をともして、今日の出来事を報告してから、ヨッコラショと掛け声をかけて立ち上がり、雨戸を閉めて歩いた。

全部の雨戸を閉め切ると、土泥のついた骨壺を洗面所へ持って行き、壺のまわりの土泥をぼろ布で丁寧に拭き取った。そして、何気なくふたを開けてみて、私は驚きで思わず

「アッ」

と声を出していた。

壺の中は土泥と小さな石ころでいっぱいになっていて、骨は土泥で真っ赤に染

められていた。蓋のしてあった壺の中にどうやって石ころまで入り込んだのかと、自然の不思議さに一層の驚きをもった。しかし、このまま新しく建立した墓へ、夫の骨壺と共に入れるのは憚られた。

そう決心すると私はもう少し時間がたつのを待とうと考えた。そしてもう誰も訪ねては来ないだろうという時刻になって、再度、洗面所の前へ立った。

真っ白い晒の布を一反、タンスの中から引っ張り出してきて、三十センチほどの長さに切りそろえた。それを何枚もこしらえてから積み重ねておいた。

まず、一枚目の白い布の上に一本の骨を取り出した。子供の骨だからホントに小さなものだったが、これは大腿骨かしらと思いながら水を上からかけてみた。水をザーッとかけたくらいでは長年にわたってしみついた泥は簡単には落ちなかった。そこで割り箸を持ってきて、蟹の脚を食べる時のように、ちょんちょんとつついては中の泥をかきだし、水をかけては泥を洗い流し、また少し残っているところをつついては水をかけ流すという作業を繰り返しながら、ようやく綺麗になったと思えるところで、一本を一枚の布にくるんで水気を拭き取った。

そうやって、一本、また一本と私は骨壺の中から骨を取り出しては水をかけ、つついては水をかけ、綺麗になったところで、次の晒で水気を拭き取るという作業を丁寧に繰り返した。

少し強い力をくわえると骨はぐちゃりとつぶれてしまいそうだった。どの骨も子供の骨らしく小さくかわいらしかった。今更ながらその骨を胸に抱きしめてみると、当時の愛おしさがよみがえってきた。骨壺も夫の半分の大きさしかなかった。生きていれば四十歳を越しているのにと思いつつも、私の脳裏に浮かぶのは五歳の時のそのままの顔形と言葉であった。

「お母さん、一度でいいから白いかたいご飯を食べさせて……」

これがこの子の口癖だった。私の胸の中で最後に呟いた言葉もこれであった。

あの戦争中の苦しさや悲しさが思い出されたが、今は胸にこみ上げてくるものはなかった。

それよりも私はこの子の命が五歳で終わるということを、もし、前もって夫と同じように知らされていたならば、あの時、どんなことをしてでも、白くてかたいご飯をあの子に食べさせてやったのにと、思わずにはいられなかった。

長男は時勢とは言いながらも、腹いっぱい食べることなく、満たされないままに死んでいった。そして私の夫は、食べれば腹が痛んで食べられないという難病にかかって死んでいった。

ふと私は自分が一体どのような終わり方をするのだろうかという問いが頭をよぎった。しかしそれを考えることは、私にはとても恐ろしいことであり、頭を横に振ってその考えを振り払った。

私は小さな骨の一つひとつまで、なおも丁寧に洗いながら、この子の魂はすでにこの世にはなく、今ここにあるのは骨と言う物体としての形であり、私はこの子の親であったということだけだ。

今、私がこの子を改めて愛おしく想い、この子に話しかけるつもりで

「白くてかたいご飯をたべさせてあげられなくてごめんね」

と、骨に言ってみても、言葉として通

じるものは何もないのだということを痛感した。
私は毎日仏壇へ語りかけているが、返事のない、あのむなしい行為となんだか同じだと思うと、クスリと口の中で含み笑いが起きた。
すべての骨を土泥の一点たりとも残っていないようにきれいにしてから、元通りに骨壺の中に収め終わったのは、夜中の十二時をとうに過ぎていた。つけっぱなしにしていたテレビも、夜の放送を終了したのか、ジジ、ジジという音と共に砂嵐の状態になっていた。
私は骨壺を仏壇の前に持って行き、夫のそれと並べて置いた。それから急に喉の渇きを覚えて、お茶を一杯飲もうと台所へ行った。その時、私は部屋の中に、何かある匂いが立ち込めているのに気付いた。
私は初め、泥と骨とが長年にわたって壺の中でまじりあい、何らかの反応を起こして熟成し、急激に空気に触れたために生じてきた匂いなのだろうと思った。
しかしそれは単なるかび臭い匂いというものではなかった。霧の深いその只中で、霧を吸い込んだ時、霧の匂いが鼻梁にまとわりつくような、言葉では表現のできない匂いだった。
そして、それは徐々に、今まで生きて暮らしてきたこの人間界では嗅いだことのない匂いだと思うようになってきた。
夫が死んだ日に、棺桶に収めるまでの間、仏壇の前で布団に寝かせていた間の、あの感覚の黄泉へと旅立つ前の匂いと同じだった。
ひょっとしてこれが黄泉の国へ逝った妻、伊邪那美命を連れ戻しに行って、迷い込んだ伊邪那岐命が嗅いだのと同じ匂いなのかもしれないと思うと、思わず身ぶるいをしてしまった。
コツコツと音高く動く時計の針にまで、匂いが絡み付き、針の速さを自在に操っているようにも感じられた。
私は今、一人でこの夜の暗さの中で死者二人と相対している。そのことがとても苦しくなってきた。できればどこかへ逃げ出したくなった。
夫であり子供でありした人々も、死者になって向こうの国へ逝ってしまった今は、私の身内というしがらみから離れてしまっていると感じた。赤い血液が流れていないということは、ただの白い骨という物体でしかないのか。それは、私とはもう何の関係もなくなったということなのだろうか。
私はその息苦しさから何とか逃れるために、仏壇から台所へ、そして奥の座敷へとフラフラとしてみたが、結局座るところは、夫と子供の二つの骨壺の並ぶ仏壇の前しかなかった。
私は改めて蝋燭に火をつけ、線香をたき、経本を取り出して正信偈から読み始めた。
私は今自分のしていることが自分の意志ではないような気がしていた。私は昼間の疲れからと、すでに夜半を回った時間帯からして、普段ではとても起きておれることはないのだがと思いつつ、そして、もう頭の隅では眠くてしょうがないのだが、それでも経本を置く気にはならず、大きな声を出して南無阿弥陀仏をとなえているのだった。
私の声は次第に大きくなり、自分でもしっかりと経本を読んでいることを自覚するようになったとき、何かが肩から

スッと抜け出ていくように感じた。私は一層楽になりたくて大声を張り上げて南無阿弥陀仏と唱えていた。

そうしているうちに次第に頭の中がぼんやりとして来るのを感じて、はっと気づくと経本を取り落していた。その時、またもや私の肩に何かがずしりと乗せられたように感じた。思わず振り返って後ろを確かめてみたが、そこには当然ながら、誰もいなかった。

ただ、何かの気配があるのは感じられたのだが、電灯に照らされた部屋の明かりと、蝋燭の燃えつきかけた灯りとが、ゆらゆらガラス戸に映っているだけだった。

私は自分が夫や長男に対して犯した様々な罪に対して、今仕返しを受けているのではないかと思ったりもした。私は苦しくて切なくて、何度もなんども南無阿弥陀仏と唱えてみた。すると、私の心は次第に空っぽになってきた。

私は何か分からないあの不思議な匂いも、肩にのしかかってくる重さも忘れていた。ただただ、念仏を唱え、楽にしてくださいお願いしますと心の底では念じていたのだ。

それは自分の罪の深さとか、今まで犯したことへの後悔での念仏ではなかった。まして、死者を弔う念仏でもなかった。単に、この今の一時の苦しみと重みから逃げ出したい一心のなせる業であったのだろう。

私は眠い目と、ぼんやりした頭にカツを入れなおして、再度、経本を取り上げて南無阿弥陀仏を唱え続けた。唱え続ければ、兎に角逃げられるかもしれないと思った。

仏説阿弥陀経まで読み進んだ時、何故か突然声が出なくなった。そして何とはなしに、ごろりと畳の上に横になった。そのまま、私は眠ってしまったらしかった。

バイクの音が遠くから聞こえて、玄関にばさりと新聞が投げ込まれる音を聞いた気がした。

私は自分の意識が、ふっと遠くへ消えたり近くに蘇ったりするのを感じていた。そして、ふと気が付いたとき、一条の光がさしているのを目の裏に感じた。

それは雨戸の隙間からの太陽の白い光だったかもしれない。逃げ場のなくなった私を救い出しにきてくれた光だったかもしれない。

ただ、雨の音はもう聞こえなかった。私は眠り続けていたのか経本を読み続けていたのか、自分がこの仏壇の前にいたことさえが不可解なことに思われるほどぼんやりしていた。

見ると蝋燭は完全に燃えつき、線香は白い灰になっていた。もう一度光の入ってくる方をみた時、私は肩の重荷が下り、さわやかな朝の匂いに満たされていることを知った。

起き上がって仏壇の正面からきちんと向かい合って、正座をした。

そしてふと視線を感じて仏壇横の鴨居にかけた夫の写真を見上げた。夫が私を見て笑ったような気がした。私もそろりっと笑い返してみた。

終